

『#草の陰刻』（松本清張著）を読んでみた。著者は1953年に『或る「小倉日記」伝』で芥川賞を受賞。『点と線』等の作品がベストセラーになり松本清張ブーム、社会派推理小説ブームを起こす。以後、『ゼロの焦点』、『砂の器』などの作品もベストセラーとなる。日本古代史にも強い関心を示す。また、『日本の黒い霧』、『昭和史発掘』などのノンフィクションをはじめ、近現代史に取り組んだ諸作品を著す。

地方検事の地道な捜査を積み上げてゆく姿を丹念に描いてゆく。

5月のある夜、四国の検察庁地方支部の倉庫から出火する事件が発生する。その焼け跡からは事務官Hの焼死体が発見された。Hと事務員のTは、庁舎の宿直を脱け出し、飲み屋で呑んでいた。酔ったTの記憶はなく、気づいた時には40キロ離れた町の旅館に居たという。検事Sは、火事で焼失した書類の復元につとめると共に、Tの言葉と飲み屋の証言の食い違いに疑問を覚える。しかし、出火の原因は、決め手のないまま、漏電による失火と決定された（放火の可能性が高いのに、失火としてしまったため後悔の念に苛まれる）。

死亡したHは古い刑事事件簿の保管を担当していたが、刑事事件簿中、ちょうど1950年から51年にかけての部分が行方不明となっていた（これにHの関与が疑われた）。Sは当時の担当検事Oに、焼失した書類の記載内容を覚えていないか問い合わせたが、Oはその後ほどなく交通事故で死んでしまう。HとTの行動を調べる中で、何者かによる放火との疑いを強めるSに、探索を止めるよう脅迫する電話が来る。Sは亡くなったOの娘S子に会って事件のヒントを得ることを強く希望するが……。事件には、人品が卑しい現役国会議員の関与が疑われ、検事Sはその筋を追うのだが……。

本作は1994年、フジテレビ系列にて放映されている。

上記の内容がどうして『草の陰刻』というタイトルになったのか、AIに訊いてみた。

回答：「作品のテーマや物語の展開に深く関係していると考えられる。この小説は、検察庁の失火事件をめぐる謎を追う青年検事の物語であり、過去の事件や隠された真実が徐々に明らかになっていく構成になっている。

「陰刻」という言葉は、彫刻の技法の一つで、表面を削って文字や模様を刻むことを指す。これを比喩的に捉えると、物語の中で隠された事実が徐々に浮かび上がる様子を表しているのかもしれない。また、「草」という言葉は、目立たない存在や自然の中に埋もれたものを象徴している可能性がある。つまり、

過去の事件が表面化せずに埋もれていたものの、主人公の追跡によって真相が刻み込まれるように明らかになっていくことを示唆しているのだろう。

著者の作品は、社会の闇や権力構造を鋭く描くことで知られている。このタイトルも、そうした作風を反映したものと言える。」

地方検察官の仕事は、犯罪の捜査、起訴の判断、裁判での立証、刑罰の執行監督など、多岐にわたる。具体的には以下のような業務を行う：

1. 捜査と起訴の判断

- ・警察から送致された事件や、検察官が認知した事件について捜査を行い、起訴するかどうかを決定する。

- ・被疑者の年齢や境遇、犯罪の軽重を考慮し、起訴猶予とする場合もある。

2. 公判の遂行

- ・裁判で証拠を提出し、証人尋問を行いながら被告人の犯罪を立証する。

- ・裁判員裁判では、一般市民が理解しやすいように分かりやすい立証を心がける。

3. 刑罰の執行監督

- ・裁判で確定した刑罰が適切に執行されるよう、刑事施設職員などの執行機関を指揮する。

4. 公益の代表者としての業務

- ・法令に定められた事務を遂行し、社会の秩序維持に貢献する。